



利尻町交流促進施設どんと郷土資料室（図書室）

北海道北部の日本海側に2つの島があります。利尻（りしり）島と礼文（れぶん）島。北海道好きなら1度は訪れてみたい島々かと。

30年ほど前に初めて2島訪れた際には礼文島から稚内へのフライトがありましたが、現在礼文空港は休止中。利尻島から稚内へのフライトも現在は運航していません。

利尻空港は札幌丘珠、新千歳空港が結ばれていてとても便利です。丘珠からの飛行時間は1時間程度。窓から利尻富士が見え、礼文島を眺めることができます。北海道本土側にはサロベツ原野。天気良ければ機内の左右どちらに着席しても楽しいです。利尻空港は利尻富士町にあります。

利尻島には「利尻町」「利尻富士町」という2つの自治体があります。

1878年、島に鷺泊、石崎、鬼脇、仙法志、沓形、本泊の6村がおかれます。1902年石崎村と鬼脇村が合併して鬼脇村に、鷺泊村と本泊村が合併して鷺泊村になりました。1949年沓形村は町制施行。1956年沓形町と仙法志村が合併して「利尻町」が誕生。その半月後、鷺泊村と鬼脇村が合併して「東利尻村」となり、1959年に町制施行後、1990年「利尻富士町」に町名変更。現在、「利尻町」と「利尻富士町」の2町が島の自治体となっています。

私が使っている「角川日本地名大辞典（北海道）」は1987年発行なので「利尻富士町」が記述されていません。

今回は利尻町と図書施設にフォーカスを当てます。「利尻町交流促進施設どんと」に図書室は入っています。

飛行機の到着時間に合わせて空港専用バスが運行されているので飛行機が欠航するとバスも運休になります。空港からバスで20分。沓形（くつがた）港フェリーターミナルで下車して徒歩10分ほど。バスにほとんど乗客がいないと目的地に近い場所で降ろしてくれる場合もあるので、乗車する時に「どんとに行きたい」とドライバーに伝えておくのが良いかと。地方のバスではこのような融通がたまにきくのです。ホテルが送迎バスを出してくれている場合もあります。「どんと」の前にはホテル利尻という観光ホテルがあるので迷うことなく行けます。

「どんと」は2002年4月に利尻町交流促進施設として開館しました。513席のホールに2018年井上陽水コンサートを行ったのはファンならご存知かと。

調理室や陶芸室などもあります。図書室は1階エントランスすぐ。正確には「郷土資料室（図書室）」という名称です。利尻島だけでなく礼文島に関する資料も所蔵しており、公民館図書室よりは郷土資料の比率が多いかもしれません。読み聞かせできる絵本コーナーをはじめ、新刊案内、カウンター前は展示を行っています。最近ではSNSでも配信するなどとても積極的です。場所から観光客もふと訪れることが多いので、利尻の自然や登山に関する展示企画が多いかもしれません。PCやAVブースコーナーもあり、設備も充実しています。

町民が頻繁に来館して交流施設として賑わっているのを強く感じます。来館者が途切れなからです。

島に唯一の書店、本庫屋書店が「どんと」から徒歩圏内にあります。さらに淡濱（あわはま）社という一人出版社が利尻町にあります。こちらは『北海道の図書館員が薦めるブックガイド』のコラムに詳細が書かれています。この経営者は元々図書室の司書で、現在も閉架書庫の整理を行っています。

1800人ほどの人口の利尻町に出版社、書店、図書室がとても丁寧に運営されていて、まさに「本の島」と言えるかもしれません。

ところで「どんと」という意味ですが、この施設が沓形岬のすぐ近くなので、沓形岬の通称「どんと岬」から取っているそうです。「どんと」というのは沓形岬にある時雨音羽（しぐれおとは）の歌碑『出船の港』の一節からきています。時雨音羽は利尻町生まれの作詞家。

大正から昭和にかけて藤原義江という歌手が『出船の港』を歌いました。

2022年6月訪問

加藤 重男